

英學に及ぼした上海の影響

沖田 一

上海は一八四三年外國貿易に開放せられ、それから十年もたたないうちに英米文化の華を咲かせたことは諸書に見える。クーリング(Cooling)とランニング(Lanning)の名著「上海史」(The History of Shanghai, Vols. I, II)はその開花の模様の詳細な記録であるといつていい。そういう土地が、幕末明治初めの大變動期にあつた我が國に影響を與えないというはずはない。文化が高みから低みに流れるのは自然の勢である。これは今まで諸家により抽象的には注目された事實であるが、資料が散逸してしまつてゐるためか、あまり研究の對象にならなかつたようである。私とても先人未開の分野が開拓できるとは思わないが、たまたま十数年かの地におつて資料の蒐集に心がけていたため、他の人には接近しがたい資料にも觸れたことがある。その點いくぶん参考になるのではないかと思う。しかしここでは紙面に制限があることだし、廣い意味の文化を對象にせず、英學という一分野に限定して述べたいと思う。しかも我が英學に著しい影響を與えたのは幕末明治初期であるから、私の論述も自然その期間に限られることになる。

一 渡航の英學關係者

尾州の漁師音吉たちが太平洋で難破したのが天保二年(一八三二年)で、それからアメリカ、イギリスと連行されて天保六年澳門に一時落着くことになつた。これらの日本漂流民は、アメリカの宣教師ウィリアムズ博士(S. W. Williams)がかの地で舊約聖書の一部を日本譯する時協力した。いろいろな資料によつて調べると、音吉は嘉永元年(一八四八年)頃上海へ移住した。そしてイギリスの貿易商デント商會(Dent & Co.)に勤めて相當な地位を占めていたというから、彼の英語力はかなり進歩してゐたはずである。だから一八五四年スターリング(J. Stirling)が率いる英國軍艦四隻が、上海から長崎へ修交のため派遣された時、通辯官として音吉がイギリス側から選任されたことに不思議はない。彼外には英語がわかる日本人は上海にいなかったたのである。

當時長崎には英語の通譯が自由にできる日本側の通譯は一人もいなかったたので、音吉が専らこれに當つた(水野鏡後守上申書)。しかし彼は英

語を話すことはできたが書くことはできなかつたらしい。それはスターリングから條約文その他の文書はなるべく英文に直して欲しいと申出があつたが、これに對し長崎奉行筑後守忠徳は、「エゲレス語には出來不申、阿蘭陀文字にては如何可有之哉」と答えているからである（古事類苑外交部）。彼は渡航者ではないが、上海での英學關係者の最初の人として一言したまでである。

文久二年（一八六二年）の幕府第一次上海派遣官船千歲丸せんざいの一行五十一人中、英學關係者が二、三見えるのは注意を要する。先ず長崎會所掛調役という資格で渡つた中山右門太である。彼は渡航の年長崎の英語稽古所（又は英語所）の頭取を命ぜられた人で（長崎の英語研究）、千歲丸で上海に渡つたのも英學修業のためであつた（中牟田倉之助傳）。

佐賀藩の中牟田倉之助（後の子爵海軍中將）も一行中であつた。文久元年から英學に志した人で、渡航の目的は航海術と英學とを修めるのにあつた。そのため上海では英學を學び、又盛んに英米人と交わつた（中牟田倉之助傳）。一行中の一人高杉晋作は中牟田の英語を批評して、「中牟田英語を解し、談話分明なり」（游清五錄）と記しているが、本人の述懐では、當時はまだ英語で自在に話し讀むことができなかったというが、もつともであろう。又彼がこの時上海で購入して持つて歸つた英語のうちにも注意すべきものがある（中牟田倉之助傳）。

- (一) 日本文典 但英板 一冊 (二) 日本和蘭英吉對譯書 但英板 一冊 (三) 千八百五十六年 上 海 曆 但英板 一冊 (四) 千八百六十二年 上 海 曆 但英板 一冊

(一) は購入の年代から考えて、オールロケット (*Rutherford Alcock, H. B. M.'s Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan*) の著作 *Elements of Japanese Grammar, for the Use of Beginners. Shanghai, 1861.* であろう。出版の翌年いも早く中牟田が持ち歸つたわけである。(二) については今のところ何とも決定できない。我が國の英學界でこの書を探り上げた人はまだないようである。(三)(四) のタイトルは「上海曆」とあるが、實は中國一般についての百科事典的記事を附録にして年々出版された日記帳で、(三) は *Shanghai Almanac for the Bissexthle or Leap Year 1856, and Miscellang. Printed at the N. C. Herald Office, Shanghai* やあり、(四) はこの日記の一八六二年度分である。

(註) (三) は上海にもその他にもあるようであるが、(四) は私が知る限り我が東洋文庫にあるだけである。もつとも中牟田家に殘存していれば二冊あるわけである。コールディエの書誌にも、クーリングの中國百科事典にも一八六二年度分は缺號になつてゐる。

又中牟田は英文から漢譯した漢文書籍を相當持つて歸つたが、その中に「六合叢談」と「伊娑菩薩論言」があるのも注意したい。前者は英名を The Shanghai Serial とするのは周知のとおりで、ワイリー (Alexander Wylie) が一八五七年から上海で創めた雑誌であり、後者は「イソツプ物語」の漢譯である。「六合叢談」のことはあとで詳述する。

又千歳丸一行の中に蘭小通詞岩瀬彌太郎の名も見える。彼は嘉永元年長崎でアメリカ人マクドナルド (Ranald MacDonald) から英語を學んだことがあり、安政元年には「エゲレス語辭書和解」の編修に従事したこともあつて (日本近世英學史)、英學の素養は一行中第一人者であつたはずであるが、滞在中の文化活動や上海から受けた影響が不明なのは遺憾である。ともかく千歳丸は「貿易試み」として派遣された官船であつたが、いろいろな方面で副産物があつたわけである。

文久三年に幕府が上海に派した第二次官船健順丸の一行の中にも、日本英學史上で著名な森山多吉郎 (榮之助) の名が見える。その時の資格は外國奉行支配調役通辨御用頭取であつた。森山は文久二年歐行の途中、淵邊徳藏と一緒に上海に寄つたことがあり、英語には堪能であつたので、何かと一行の中心になつたことは容易に推察できる。この時森山や一行の主腦部はトーマスという者と日英語の交換教授をし、上海港々則・運上所規則を邦譯して持ち歸つた (黃浦誌)。

この時分から上海へ渡る邦人は激増している。最早長崎だけでは邦人の文化的要求を満さなくなり、上海の西洋文化に着々として吸引されていつた。しかし當時はまだ海外渡航の禁令が解かれておつたわけでないから、私航・密航の人はなるべく自己を韜晦しようとしたため、手記・記録の類はあまりなく、そこにこういう方面の研究の困難さがある。我々の眼に觸れるのはその何十分の一にも當らないだろう。

文久三年末には薩摩の長尾八藏、小林六郎、上野眞陽ほか一名が上海に密航した。彼等の目的についてはいろいろに取沙汰されているが、それは大部分口實で、實はいわゆる蕃語修業のためであつた。彼等はしばらく滞在するうち旅費に窮して難澁していたが、ちやうど翌元治元年正月になつて池田筑後守一行が歐行の途次上海に寄港したので、池田に助けられて送還された (岩松太郎航海日記、幕末外交談、壘邊一夕談)。

この頃八戸喜三郎 (弘光) とか、伊豫宇和島の曾根常之助も上海で活躍した。八戸は前駐日ハワイ總領事だつたヴァン・リード (Van Reed) と交わり (吳淞日記)、曾根は大望をいだいて上海で英佛語を學んでいた (安部保太郎筆稿)。

次に日本英學史上見逃してはならないのは、慶應二年九月十五日から翌年五月まで上海に滞在して、ヘボンの「和英語林集成」の印刷に助力

した岸田吟香である。彼の仕事は校正の一部と、辭書に必要な日本文字の版下を書くことであつた（吳淞日記、Dr. Hepburn's Japanese Dictionary）。この辭書は小東門外の美華書館（American Presbyterian Mission Press）でギャンブル（Gamble）により印刷され、日本の英學に貢獻することになつた。この時の吟香の日記「吳淞日記」は英學史上からだけなく、文化史的に非常に價值のあるものだが、二十數年前に雑誌「社會及國家」に一部分が掲載されただけで、廣く知られていないのは遺憾である。

文久二年堀達之助が編修主任になつて出した「英和對譯袖珍辭書」は一般から非常な歡迎を受け、そのため慶應二年改正増補版が刊行された。又別に需要の増大に着目して薩藩の高橋新吉・前田獻吉・前田正名などが改正増補した。當時長崎にいた宣教師フルベッキ（G. F. Verbeck）の意見を徵し、更にフルベッキの仲介で前田正名・高橋新吉は明治元年上海に渡り、翌年美華書館から千五百部印行した。これが「改正増補和譯英辭典」である。この書名は親本とはだいぶ違ふが、順序として第三版と稱した。改訂第四版も明治四年上海美華書館で印刷した（復軒雜纂、高橋新吉上海日記）。

明治になつてからも上海は最も手近い洋行先で、日清戰爭頃まで英學修業のため上海へ渡つた人は夥しい。今参考のため明治四年までに英學のため渡航した代表的な人を擧げてみよう。明治二年六月紀州藩の和田雄二郎は海外雄飛の志を立て、上海に渡つて英清兩語を學び、同五年には外務六等書記生に任ぜられて日本公館（後の領事館）に勤めた（對支回顧錄）。

明治二年七月佐賀藩士江副廉藏は英學傳習のため上海に航し、同年九月には同藩士江口三郎助、同年十一月には同じ藩士城島謙藏が英語を修めるため渡航した。彼等は皆二十二、三歳の屈強の若者で、上海から更に轉じて香港・寧波へも行つた（上海今昔談）。

岡山の西穀一は早くから隣邦に着目し、藩に上書して清國遊學を請い、容れられて明治三年四月上海に航した。同行者には同藩の青地秉太郎があり、同藩の加藤次郎も神戸でこのプランを聞き、元來薩摩行きの途中だつたのを變更してそのまま一行に加わつた。上海で英人について英語を學ぶ傍ら清國事情も研究した。明治四年には鹿兒島藩士小牧善次郎、伊地知清二郎、黒岡勇之丞、兒玉利國、吉田清貞、佐賀藩士福島禮助、成島忠藏、成富成風、土佐藩士桑原戒平、尾張藩士水野淳藏などは清國留學を命ぜられて、上海で英清兩語を修めた（對支回顧錄）。

當時上海で英語を修めた者は直接英米人についたものと思われる。しかし十年代になると上海の外人學校に入學する者もでてきた。關口靜岡縣令の養嗣子關口隆正はこの頃上海に留學し、當時蘇州にいて俞曲園に師事して漢學を修めていた檜原陳成（後の外交官、北清事變で死亡）と交わ

り、檳原に洋學の必要を説いた人である。關口は子息を内地から呼寄せ、上海虹口の聖芳濟學堂（一八七四年創立）に入學させている（陳子徳の傳語）。これは St. Francis Xavier's School だ、フランス人經營の學校であつたから、邦人は俗にフランス學校と稱した。フランス學校で英語も教授したのである。この學校は邦人の密集地帯になりかかつていた虹口にあつたし、かつ東洋人をた易く入學させたので、以來同校で學んだ邦人は相當の數に上つた。

これは明治も終末時分の資料であるが、私は最後に上海靜安寺路外人墓地（Bubbling Well Road Foreign Cemetery）にある一基の邦人の墓を紹介したい。その墓碑に次のようにある。

大日本兵庫縣加古郡 八播村内下村出身 故小川與十松墓 明治四十四年十月十一日亡 英學修業中病死十九歲 橋本左升

（註）私が原籍地で調査したところでは、この墓を建てた橋本左升とは實は橋本たみ（小川與十松の叔母）である。これを刻んだ中國人石工が日本假名を知らなかつたため隨意に漢字に改めたのである。他にもそういう例がある。

これは上海が明治の末年になるまで邦人の英學修業地であつたことを物語る資料であると思う。

二 英書の漢譯本

上海の出版文化が——それは主として英語を経由したものであつたが、我が國の文化に及ぼした點を以下考察してみたい。上海を経由して日本に舶載された英書とか、上海で印刷された英書の漢譯本で、幕末どれくらい輸入されたかは容易に算定できないが、それはかなりの數であつたと思われる。

先ず上海で印刷された英國關係の雜誌とか英書の漢譯本で、我が國に舶載されたものを考えてみたい。「六合叢談」のことは前に少し觸れたが、これはレッグ（James Legge）が香港で創めた月刊雜誌「遐邇眞珍」（The Chinese Serial）と同種のもので、成豐七年（一八五七年）七月からワイリーが上海で創めた月刊誌である。内容は自然科學・人物評論・雜報であり、翌年七月まで繼續し、上海の墨海書局で發行した。これは中國だけでなく日本でも歓迎され、日本では宗教記事を除いて「官版六合叢談」として再刊された（The Chinese Periodical Press）。

當時我が國では英米書籍への要求が非常に盛んであつた。それまでも我が國で英語は研究されたが、それはどちらかといえば鎖國手段・攘夷

手段としてであつた。ところがペリーやハリスが來航するようになってからは研究態度は一變して、進んで英米の學問を採り入れて國防の充實を計ると同時に、文化水準を高めるといふ方向に進んできた。それで從來の蘭學に英學がとつて代るようになったのである。しかし英米の原書は高價でしかも讀解が容易でない。この時中國では外國宣教師が中國人用に英書を漢譯して發行していた。これは當時の我が國の知識人には恰好のもので、漢譯本の大部分は中國で出版せられるとすぐ日本にも輸入されて、邦人の學問の向上に貢獻した。これは各種分野に及んでおり、文久二年中牟田が上海で購入して歸つた書籍のうちにも「數學啓蒙」「代數學」「代數積拾級」「地理全志」「新約全書」「伊娑菩薩喻言」などの漢譯本が含まれている。これらの書物は邦人に大きい影響を與えたもので、先づ理學方面に次のものがある。

- (一) 全體新論 成豐元年(一八五一年) 英醫合信著
- (二) 博物新編 同 五年 同右
- (三) 西醫略論 同 七年 上海仁濟醫館刊行
- (四) 婦嬰新說 同 八年 同右 同右
- (五) 内科新說 同 右 同右 同右
- (六) 植物學 ウィリヤムソン著

英醫合信とは英國の宣教師ホブスン(Benjamin Hobson)で、一八三九年中國に渡來し、澳門・香港・廣州を経て一八五六年上海に轉じ、上海の仁濟醫館で診療に従事していた。(一)(二)は廣州方面で刊行されたものだが、(三)以下は上海での刊行である。これらの書物は日本で非常な歡迎を受けたので、句讀點や註釋を施して早速翻譯され、再三再四改版されている。「西醫略論」は安政五年(一八五八年)に、「婦嬰新說」は同五年に、「内科新說」は同六年に何れもその初版が三宅良齋により翻譯されている(日本醫學史、中國醫學史、幕末より明治初年に互り我邦の醫學に裨益せる支那醫書)。(六)はロンドン傳道協會の Alexander Williamson の原著である。

(註) 岸田吟香は慶應三年上海でできる中國人から「博物新編」「婦嬰新說」「内科新說」「地球略説」を贈られている(吳淞日記)。この「地球略説」も我が國に舶載されたものと思う。

理學關係以外では次のものがある。

(七) 英國史 Thomas Milner (華名 托馬斯米爾納) 著

(八) 合衆國史 E. C. Bridgman (華名 裨治文) 著

(九) 地理提要 ウェー著 (未詳)

(一〇) 地文學 W. Muirhead (華名 慕維廉) 著

(一一) 歴史地理 同右

(一二) 萬國史要 Karl Gützlaff (華名 郭實獵) 著

(註) これらの表を作るに當つて「老監督ウィリアムス」「中國醫學史」によるところが多かつた。

(七)は(一〇)の著者ムユイアヘッドが漢譯したもので、我が國では文久元年(一八六二年)長門の溫知社が「英國志」として訓點を附して翻刻した。以上のほか「伊娑菩喻言」など中牟田が持ち歸つたことは既述した。又いつ頃我が國へ輸入されたのか明かでないが、英の宣教師バーンス(William Chalmers Burns, 1815-68)が傳道に役立てるためバンヤンのピルグリムス・プログレスを中國人の助力を得て漢譯し、これに「天路歷程」という譯名を與えた。初版は一八五三年厦門から出版され、再版は一八五六年香港と上海とで發行された。本書も我が國に早々輸入されたと思え、「天路歷程」の譯名は現在まで行われている(幕末明治耶蘇教史研究)。

安政六年(一八五九年)米人宣教師リギンス(John Liggins)は保養のため上海から長崎へ渡來したが、滯在中は上述したような漢譯本を販賣することが仕事の一部であつた。彼は滯在十カ月の販賣狀況を次のように語つてゐる。「以上の書籍を今日迄、千部以上賣却いたし候が、購求者は日本上流社會の人士に候。其等の書の多くは、隨に日本人の手により再版せられ、帝國内に廣く行き渡りたる事と存候」(老監督ウィリアムス)又フルベッキも西洋人の漢文著述が長崎で非常に歓迎せられるので、中國から夥しい書籍を取寄せて販賣した。書名は上述したものとだいたい同種のものであつたと思われる。漢方醫笠戸順節は西人の漢文著述の愛讀者であつたという(長崎の英語研究)。

以上の漢譯書のうち特に醫書が我が國の醫學の進歩にどんな貢獻をしたかいうまでもない。當時の譯語で今もそのまま使用されているのが相當ある(幕末より明治初年に互り我邦の醫學に裨益せる支那醫書)。人文科學の方面でも「英國史」「合衆國史」は多數の讀者を持ち、後者について特記すべき一例は、新島襄の世界觀に非常な影響を與えたことである(日本近世英學史)。

ヘボン博士は「和英語林集成」刊行の後、マカーテイー(D. B. McCartee)が漢文でキリスト教の教理を説明した書物を和譯し、横濱で祕かに木版を作らせ、それを一八六七年上海に送つて五千部印刷させた。この漢文のタイトルも和譯のタイトルも不明だが、英文では *A True Doctrine Explained* となつてゐる。これが日本で發行されたキリスト教のトラクトの最初のものであつた(*Hepburn of Japan*)。このようにして上海は幕末明治のキリシタン文化とも密接な關係を持つてゐる。

これら漢譯書は元來中國人のために作られたものだが、それが偶然に邦人に利用されるようになったのである。そしてこれらは——特に自然科学書は、保守的傾向の濃い中國人にはあまり顧みられず、邦人に愛讀されて所期の目的を達したことは興味の深いことである。

三 英語辭書

日本で需要された漢譯書が、上海での印刷であつたことは偶然のことともいえるが、緻密な技術を要する英語辭書類の印刷地が上海であつたことは、當時の事情として止むを得なかつた。勿論日本で印刷された辭書類もあるが、部數を多くしかも精巧なものを得る場合には上海が選ばれたのであつた。

嘉永元年(一八四七年)發行のメダースト(W. H. Medhurst)の「華英字典二冊」(*English and Chinese Dictionary*)などは、率先して英語を學んだ長崎の唐通詞に行われたが、これは上海での印刷であつた(長崎の英語研究)。

リギンスは長崎滞在中(前節參照) *Familiar Phrases in English and Romanized Japanese* を著わしたが、これは一八六〇年上海の London Mission Press での印刷であつた。次で文久元年オールモックが *Elements of Japanese Grammar* を上海で印行してゐる(第一節參照)。

一八六三年になるとブラウン(S. R. Brown)が *Colloquial Japanese, or conventional sentences and dialogues in English and Japanese, together with an English-Japanese index to serve as a vocabulary, and an introduction on the grammatical structures of the language. Shanghai, Mission Press, 1863* を公刊してゐる。本書は非常に有益で、會話書として價値の高いものであることは知られてゐるが、上海で印刷されたことに言及した人は我が國にないようである。私は原本を見る機会を得ないが、コールディエやヴェンクスターンの書誌によると上海美華書館發行とある。

へボンの「和英語林集成」が慶應三年上海美華書館で印刷されたことは既述した。明治五年の再版も同館の印刷である。明治二年及び四年の「改正増補和譯英辭典」即ち「薩摩辭書」がやはり同館の印刷であることも既述した。この辭書はその後數回我が國で覆刻されているが、明治十八、十九年に發行された「^{大正}増補和譯英辭林」と題した四種類は、東京や大阪で印刷されたにも拘らず、その英文の扉にはやはり Shanghai: American Presbyterian Mission Press 1871 と繰返してあつた（日本英學史の研究）。

へボンの「和英語林集成」に負うところが多かつた島田胤則らの「和英通語捷徑」は、明治五年の長崎發行であるが、これもやはり印刷は上海美華書館であつた。

メダーストの English and Chinese Dictionary を臺本にし鄭其照の「華英字典」は、光緒五年（明治十二年）の上海申報館印行である。これは早速明治十四年（一八八一年）永峰秀樹訓譯の「華英字典」（竹雲書屋發兌）となつて現われた。

これと同じく明治五年盧公明 (Rev. Justus Doolittle) 著「英華華林韻府」(Vocabulary and Handbook of the Chinese Language) は、矢田堀鴻挿譯明治十四年「英華學藝辭書」となつて出現した。本書は發行所は福州とあるが、出版地は上海であつたと思われる。

以上でみると、なんといつても日本の出版文化に最も貢獻したのは上海美華書館であり、次で上海墨海書局 (London Mission Press に當ると思われる) であつた。明治六年の松田爲常外二名の「薩摩辭書 獨和字典」と稱するものは上海の Amerikanische Missions Buchdruckerei で印刷したというからこれも美華書館であろうし、明治四年の Nugent の佛和辭書から翻譯した「佛和辭典」も同書館の印刷であつた。同館は一八五〇年寧波から上海の小東門外に移り、ギャンブルを技師として東洋の印刷文化に貢獻した功は大きかつた (The Mission Press in China)。

(註) 英華書館はその後北京路に移り、更に北四川路に移轉したようであるが、次第に勢が振わなくなつた。一應育成の使命を果したからである。

四 印刷術

幕末時の西洋印刷術の傳來については諸家の詳細な研究があるので、私は略言するに止めたい。嘉永四年（一八五一年）長崎の本木昌造が苦心して活字を製作したが、それは不完全なものであつた。近代活版術の基礎になる方法を傳習完成したのは明治二年で、それは上記美華書館のギャンブルが長崎に寄港した時、本木に教えたのであつた。The Mission Press in China に次のようにある。

英學に及ぼした上海の影響

「ギャンブル氏の葬式の時次のような説教がなされたが、その陳述を確認することは容易である。『今後一世紀の間、中國又は日本で、聖書であれキリスト教の書物であれ、科學書であれ、ギャンブル氏の手勞にならないものはないであろう』ギャンブル氏は蠟型電胎法の母字製作と小型の活字を傳え、後者を日本に傳えたのは一八六九年であつた(拙譯)」

なおグリフィスの Verbeck of Japan に、一八六三年フルベッキが上海に滞在していた時のことを述べて、「ある意味では彼はギャンブル氏と共に、日本における印刷機の創設者であつた(拙譯)」とある。日本への西洋印刷機傳來についてのフルベッキの功も大きい。しかもそれは皆上海を經由してであつた。

以上とは別に、明治三年子安峻・柴田昌吉などが謀つて上海から活字や活版機械を買い、横濱に日就社を設立し、續いて英和辭書を刊行した。これが我が國で英和辭書を印刷した初めであるという(讀賣新聞の沿革)。

これを要するに印刷機・印刷術はほとんど上海から輸入せられ、これが日本の英學ないし洋學と密接な關係を持つたのであつた。

主要参考文献

- 古賀十二郎 長崎の英語研究 昭二二
中村孝也 中牟田倉之助傳 大八
高杉晋作 游清五録 文久二(民友社 大正五年「東行先生遺文」に所載)
重久篤太郎 日本近世英學史 昭一六
杉尾勝三 上海今昔談(「上海日報」明四〇年三月一六月)
小澤三郎 幕末明治耶蘇教史研究
田邊太一 幕末外交談 明三一
三宅 秀 爐邊一夕談(明三四「醫海時報」)
大槻文彦 復軒雜纂 明三五
岸田吟香 吳淞日記(からつと) 慶二一三

(註) 吟香の在滬當時の日記で、現在残るのは約半分である。圓地與四松氏により雜誌「社會及國家」昭和六年八・十一月號、同七年一・三・四・五・八・九・一〇・十一月の十回に互つて發表せられた。今日ではこのバックナンバーに接することはほとんど不可能である。

安部保太郎筆録 (慶三草稿 遠州笠井町 森田家藏 京大陳列館に寫本がある)

富士川 游 日本醫學史 昭一八

陳邦賢 中國醫學史 民國八

佐藤恒二 幕末より明治初年に亙りて我邦の醫學に裨益せる支邦醫書〔東京醫事新誌〕第六〇年三〇〇〇號)

元田作之進 老監督ウィリアムス 大三

豊田 實 日本英學史の研究 昭一四

對支功勞者傳記編纂會對支回顧錄 昭一一 (同 續對支回顧錄 昭七)

關口隆正 陳子徳の傳話 (草稿)

The Mission Press in China, being a Jubilee Retrospect of the American Presbyterian Mission Press, with Sketches of other Mission Press in China as well as

Accounts of the Bible and Tract Societies at Work in China. Shanghai, 1895.

William Bramsen: Dr. Hepburn's Japanese Dictionary. (N.-C. Herald, Feb. 13, 1873.)

Roswell S. Britton: The Chinese Periodical Press, 1800-1912. Shanghai, 1933.

William E. Griffis: Hepburn of Japan and His Wife and Helpmates, A Life Story of Toil for Christ. The Westminster Press, Philadelphia, 1913.

Ibid.: Verbeck of Japan. 1901.

高橋新吉 上海日記 明元

(註) 前田正名が「薩摩辭書」明治二年版の印刷のため上海に行つた時に書いたと稱する日記が、前田三介氏により昭和十二年四月一日發行「社會及國家」(第二五三號)に、「前田正名上海日記」として發表されている。前田三介氏によると、この日記は明治元年四月廿九日から翌年の二月十三日までであることになつてゐるが、發表された部分は明治元年四月廿九日から同年五月七日までである。同氏は「其大半を左に掲げることにしたが殆ど辭書に關することばかりで、夫れ以外のことが少ないのは稍々遺憾とする次第だ」と述べられている。それが恐らく全文を發表されなかつた理由であらうと思う。實際その日記は吟香の「吳淞日記」とは違つて、辭書の原稿の加筆訂正や、校了分の枚數を示すものが大部分であるから、前田氏の興味を殺いだのもつともだと思われ。しかしてできるなら後に述べるような理由で全文を掲載して欲しかつたと思う。前田三介氏によると、正名は明治元年四月廿九日大阪を發して、閏四月三日上海に着き、それから一旦歸國して同年十月十四日再度渡航したという。

しかし私はこれを日本英學史の一資料として吟味を加えておきたい。そうでないと前田三介氏のような近親者の筆になるものだからそのまま信ぜられ易いからだ。第一に同氏はこれを假りに「上海日記」としておられるが、原草稿である「海老茶色の皮表紙で横五寸縦三寸ケント紙の洋風手帖」には、「明治元

英學に及ぼした上海の影響

年十月十四日正名上海行録」とある點である。前田氏はこの日記は四月廿九日から始ると述べておられるが、そうするとこの十月十四日は何を意味するのであろうか。私はこの十月十四日が「正名の再度の上海到着日」と一致することに注意したい。第二の疑問は日記の内容から来るものであるから、英學史に係の深い部分を次に引用する。

「閏四月四日。半晴。書籍出版の有様致談判候處、本書甚誤謬有之、且英字にて無之字過分有之候に付、自分誤を我々共に致相談しても可致候へ共、中々閑暇無之候に付、ウリヤムスと申者當地に罷居候に付、我々共連越よく談判いたし候て可然候半と存候へば此人は和語も通じ候に付旁々以都合宜敷と申事候、明日林も同道右ウリヤム處へ差越筋に取置置候。

何千部出來可致哉と相尋に付、貳千四百部拵度段申述候處可致段承り候。

壹部何ドル計の賦に候哉と尋候處、六ドル位と返答いたし候。何ヶ月計にて可致成就相考候哉と尋候處、四五ヶ月位にて是非仕度段申通候に付、其内には随分成就可致段承り候。尤何分輕目に相成候様可致に付、算當の處は近日一先出版いたし候上、明日に可申通段承り候。

右今日の談判にて候。今朝コストリカ出船に付前田氏兄弟へ書狀差遣候事」

これによつて次のことが考えられる。(一)「今朝コストリカ……」とあるのは、コストリカ號が今朝長崎向け上海を出帆するから、それに托して内地におる前田獻吉・正名兄弟に書狀を出す意であらう。そうするとその時正名が上海にいることは不合理であるので、この日記の筆者は前田兄弟以外の者でなければならぬ。(二)日記中「林」とあるのは前後の關係から中國人と考えられる。従つてこの日記に見える邦人は「岡田氏」と「高橋」との二人である。

日記中「我々」とはこの二人を指すようである。岡田の方には「岡田氏」と敬稱を付し、高橋には敬稱がつけてないから、この日記の筆者はどちらも高橋新吉であるようである。それでは正名はいつ上海に行つたかといえ、表紙に書かれている明治六年十月十四日である。即ち四月廿九日から、前田三介氏が發表された五月七日までは高橋の筆になり、それをあとから行つた正名が引繼いで、表紙に起稿年月日を記入したものと考へたい。この日記の全文が發表されていたら、この間の事情がもつと分明になると思ふのである。なお日記中のウリヤム(ス)は Channing Moore Williams であらう。

なお第一、二次上海派遣官船や日本漂流民關係の文獻については次の拙稿を参照されたい。

幕府第一次上海派遣官船千歲丸の史料 (『東洋史研究』第十卷第一號・第三號)

日本と上海 昭一八

上海に關する文獻目錄 昭一九 (上海市政研究會の依頼により私が編集したものである)

滬上史談 昭一七、一八